

環太平洋価値観国際比較調査 ――総合報告――

データ科学研究系 調査解析グループ
新機軸創発センター 社会調査情報研究グループ
教授 吉野諒三

1 環太平洋価値観国際比較調査の背景と意義

1.1 背景

2006-2009年度において、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究A「環太平洋価値観国際比較調査---東アジア周辺諸国の「信頼感」の統計科学的解析---」（課題番号 18252001、研究代表 吉野諒三）を遂行し、特に本年度はその総合報告書の作成に従事した。

この研究は、歴史的には統計数理研究所における1953年以來の「日本人の国民性」調査及び1971年以來の「意識の国際比較」調査の延長上にある。「日本人の国民性」調査は、戦後民主主義の基盤としての官民の世論調査発展と緊密に結びつき、「意識の国際比較」調査は、**連鎖的調査分析**（Cultural Linkage Analysis, CLA）の確立へとつながった。そしてさらに、最近行われた我々の他の国際比較調査研究とともに、この研究は、計量的文明論としての「**文化多様体解析**（Cultural Manifold Analysis, CULMAN）」という方法論の確立を目指す研究の一環としても位置づけられる。

1.2 意義

冷戦が終了し、世界情勢の大きな変動とともに、社会の伝統的枠組が大きく変わり、社会生活の基盤であった人々の信頼のあり方も大きな影響を受けている。伝統的な産業社会から高度情報化社会への過渡期と見られる現在、従来の家庭、学校、職場での人間関係のあり方にも崩壊が生じ、新たな時代の流れが確立するまでの混乱が続いてきた。

一方、政治経済の視点からは、欧州共同体や南北アメリカ圏のみならず、東アジア圏の再編成が唱えられている。東南アジアを含む東アジア圏は、欧州とは異なり、多様な文化、歴史を持つ国々や地域の集合であり、政治にせよ経済にせよ、それらの統合は必ずしも容易ではないであろうが、現実にはASEAN等の協力関係が推進されつつある。我々が前調査研究の申請時に、「東アジア」という言葉を用いた際には、この言葉はまだ一般には、地理的にあいまいなものでしかなかった。しかし、今日では「**東アジア共同体**」や「**アジア・太平洋共同体**」等々の国際協力の枠組みの検討が始まり、政治経済的に実体を持った言葉となっている。特に、2009年夏に政権を獲得した民主党は、「東アジア共同体」の旗を掲げている。

こういった世界の流れを適格に把握し、将来を見通すための実証的基礎情報を収集すべく、各国、各機関が様々な社会調査、国際比較調査を遂行している。例えば、世界価値観調査（World Values Survey）は、世界の20～30数カ国で共通質問項目を用いた国際比較調査データや時系列比較可能なデータを提供し、学術研究にも行政施策にも資するところが大きい。しかしながら、過去の東アジア地域における調査の実情を詳細に調べてみると、質問の翻訳や標本抽出法調査の実際などその結果には疑いが隠せない。

このような背景があり、我々は、アジア・太平洋地域の調査は、やはり当該地域の人々によって慎重に推進されるべきであるという認識に至った。我々は、各国でどの程度統計学的に適正な標本抽出調査が遂行でき、また国際比較可能性が保てるのかという課題を自ら実証的に検討することを主眼にし、それを把握した上でアジア・太平洋諸国の人々の価値観や意識を比較分析する課題に取り組んできた。

2. 研究成果

われわれの研究は、一般社会意識調査のスタイルをとり、人々の生活一般に関する多様な項目を含んでいる。しかし、特に21世紀初頭の急変しつつある世界情勢、そしてその中でも、急速

に変化する東アジア周辺の国々と、数々の問題を抱えながらも再秩序化されつつある国家間の関係を考慮して、日本と他の東アジア周辺諸国の人々の価値観、対人的信頼感や法意識を含む人間関係に関する意識、自然観や生命観の統計的解明に適切と思われる項目を検討して試行してきた。

調査質問票は、これまでの国際比較調査で用いられてきた項目やそれらを一部修正した項目を取り入れ、さらに当該調査のために作成した新項目などで構成されている。これは、われわれの「東アジア価値観国際比較—信頼感の統計科学的解析」(2002-2005 年度)の成果に基づき、その拡張としてのアジア・太平洋地域の比較調査にふさわしい調査票となることを意図した。

環太平洋(アジア・太平洋)諸国の状態は複雑であり、特にインドでは、多言語、多民族社会であり、社会的には環境や交通、経済などにも混乱が見られ、複数の言語の調査票の準備や、母集団を代表する統計的無作為標本抽出の困難などに直面した。また、調査開始時にも、ムンバイのテロの発生など、落ち着いた社会での調査からは程遠い。しかし、我々の基本方針は、現地で通常用いられている調査方法を尊重し、その実態を学ぶことである。回収データの質の低さの点で、これまで我々が遂行してきた国や地域と比較して、統計的方法論や実践の手続きなどの諸問題に憂いを抱かざるを得ないが、調査研究者としてはそのようなデータの中から、いかに信頼できる情報を抽出できるか考えていかねばならない。

国際比較としての詳細なデータ解析も、実際の調査では避けられない各国・各地域の言語の差異、調査方法の差異などを考慮し、単純に回答分布の皮相な数字の大小比較ではなく、他の関連諸国・地域の調査データや資料、情報とともに、慎重に時間をかけて安定したパターン構造を浮かび上がらせるような分析がなされて行くべきである。これまでの成果の一部は、以下の参考文献表にあげる。さらに詳細は、それらの巻末の参考文献表をもご参照願いたい。

参考文献

- Fujita, T., and Yoshino, R. (2009). Social values on international relationships in the Asia-Pacific region. *Behaviormetrika*, 36, 2, 148-165.
- Tsunoda, H., Yoshino, R., & Yokoyama. (2008). Components of Social Capital and Socio-Psychological Factors that Worsen the Perceived Health of Japanese Males and Females. *The Tohoku Journal of Experimental Medicine*, 216, 2, 173-185.
- 吉野諒三 (2005). 東アジア価値観国際比較調査—文化多様体解析 (CULMAN) に基づく計量的文明論構築へ向けて—. *行動計量学*. 第32巻2号, pp. 133-146.
- 吉野諒三 (2005). 富国信頼の時代へ—東アジア価値観国際比較調査における「信頼感」の統計科学的解析—. *行動計量学*. 第32巻2号, pp. 147-160.
- Yoshino, R. (2005). Trust and National Character. *Comparative Sociology*, 4, 3-4, 417-450.
- Yoshino, R. (2006). A social value survey of China. *Behaviormetrika*, 33, 3, 111-130.
- 吉野諒三編. 「東アジア国民性比較 データ科学」. 勉誠出版. (2007).
- 吉野諒三 (2008). 海外の標本抽出面接調査の方法. *いんぷおるむ* 第53回. 新情報, Vol. 95. pp. 7-12.
- 吉野諒三 (2008). 「国民性」と環境問題 —文化の多様性を受け入れる政策立案のために—. *環境情報科学* 37, 1, pp. 21-26. (特集号)
- 吉野諒三 (2008). UFO は存在するか? —お化け調査再考「合理と非合理の間」—. *市場調査*, 273, pp. 4-13.
- 吉野諒三 (2008). 継続調査の課題と将来. *社会と調査*, 創刊号, pp. 29-35.
- Yoshino, R. (2009). Reconstruction of trust on a cultural manifold. *Behaviormetrika*, 36, 2, 114-147.
- 吉野諒三・千野直仁・山岸候彦. *数理心理学*. 培風館. (2007).
- Yoshino, R., Nikaido, K., & Fujita, T. (2009). Cultural manifold analysis (CULMAN) of national character. *Behaviormetrika*, 36, 2, 89-114.
- 統計数理研究所の Web ページも参考 (<http://www.ism.ac.jp/~yoshino/>).